令和5年度 No.11

駒岡小学校だより

3月号

言葉の力を信じる

校長　岸田 薫

今年は4年に一度の閏(うるう)年ですが、一日多くても、やっぱり3月があっという間にやってきました。3月19日には第51回卒業式が、25日には修了式が行われ、今年度の教育活動も区切りを迎えます。これまでのご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

さて、中面でも取り上げていますが、2月16日に、6年生のおうちの方をお招きして「感謝と成長の会」を開催いたしました。体全体を使いながら歌う6年生の姿にじぃんときたり、入学式から始まる6年間の写真のスライドショーに子どもたちの成長を感じたりと、卒業を目前に控えた6年生の思いを深く感じる時間となりました。中でも私が心打たれたのは、詩の群読です。6年生の国語の教科書にも載っている、谷川俊太郎の「生きる」という詩をベースに、子どもたちが台本を作ったものでした。「生きているということ　いま生きているということ　それは…ということ　…ということ　…ということ　…」というフレーズが繰り返されるたいへん有名な詩です。この「…」の部分を、6年生が考えて言葉にしたのです。実に様々な「生きる」が表現されました。どれも、今年の6年生らしい、あの子たちらしい、素直で飾らない等身大の言葉の数々でした。

言葉というものは、それを発する、それを感じる、それを想う「人」そのものだと思います。「言葉によって人はつくられている」と言えるかもしれません。これまでに出逢った人、もの、こと、そして喜怒哀楽。その人の生き方――。それらの全てが、言葉としてその人の中に蓄積され、人を形づくっていくように思います。

言葉は、単なる「知識」ではなく「体験」です。辞書的な意味は、どこまで行っても「知識」の範疇を出ませんが、ある日何かの体験と結びついたとき、何かの文脈と合致したとき、瞬間的に腑に落ちたとき、その言葉は「知識」を超えて、その人だけの、意味ある、価値ある、魅力ある言葉になるのだと思っています。

6年生の「生きる」の群読を聞いたとき、ここで語られている言葉は、「体験」として定着した本物の言葉だと感じました。言葉の力を感じました。そして、自分たちの生き方を表現する言葉、6年生という今だからこその言葉をもっている子どもたちに、胸が熱くなりました。これから先、子どもたちがどんな言葉を紡ぎながら生きていくのか、とても楽しみです。

卒業式には、言葉の力を感じさせてくれた142名の6年生に、私が届けたい想いを、私の言葉で伝えようと思います。修了式には、6年生の思いを受け継ぐ599名の駒っ子たちに、私の言葉でエールを贈ろうと思います。そして、ご家庭や地域のみなさまにも、今年一年の感謝の気持ちが届きましたら幸いです。一年間、本当にありがとうございました。